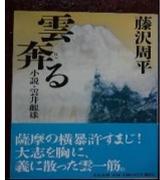


	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
27	 ・はしり雨「はしり雨」所収	新潮文庫・1980	短篇	八幡様の軒下に潜んでいる嘉吉というその男は、昼は研ぎ屋で夜は盗人だ。いまは道のむこう側の古手問屋を狙っていた。雨が上がったら忍び込むつもりだ。そこへ若い男女が、雨を避けて駆け込んできた。赤子ができたと告げる女に、男は急に冷たくなった。二人が去ると、男二人が入ってきて、喧嘩を始めた。次に病気の女と小さな子がよろめきながら歩いてきて、休んだ。若い女に走った亭主のところに金をもらいに行き追いつ返されたようだ。嘉吉が盗人になったのは、身籠った女房が病気で死に、寂しさに耐えかねたところに、幸せそうな笑い声が聞こえる家があったからだ。歩き出した母親がよろめくのを見て、嘉吉は思わず飛び出した。 ◆ほかに「贈り物」「うしろ姿」「ちきしょう!」「人殺し」「朝焼け」「遅いしあわせ」「運の尽き」「捨てた女」「泣かない女」の九篇。	○
28	 ・荒れ野「闇の穴」所収	新潮文庫・1978	短篇	あの山を越えれば陸奥国だと教わって歩いていたが、いつまでたっても野原だ。道が二手に分かれるところで、左を選んだ僧の明舜は、日が落ちて野宿を覚悟した。ようやく水を探し当てたところに澄んだ女の声が聞こえ、道から奥まったところにある女の家泊まることになった。女は三十前に見えた。猿だという干し肉がうまかった。翌日の夕暮れ、川で水浴をしている女の裸身を見た。四日目の夜、女の部屋に行くと女は目覚めていて、熱くしなやかな肌が明舜を包んだ。女の家で居続けてそのまま一月が過ぎた。少し飽いてきた明舜が道の先に進んでみると、廃村があり人骨が重なっていた。野原で出会った武士に人骨の話をする、鬼女の仕業だといった。鬼女は劫を経た老婆だというのが-----。 ◆ほかに「木綿触れ」「小川の辺」「闇の穴」「閉ざされた口」「狂気」「夜が軋む」の六篇。 □作者のことば□: 日本が日中戦争に突入したのは、私が小学校五年の時である。その後戦争が拡大すると、風景は少し荒れた。そして戦後は、なにか別のもので風景の中に入り込み、風景は変質し、ある場所では破壊された。私の心の中に残る風景は、そういう意味で私の古き良き時代を兼ねるかのようにもみえる。だが実際には、そういう懐古趣味とは別に、その風景はある重さを持って、私の中に生き続けている気がする。多分それは、私が初めて意識した世界であるからだろう。それは後年出会うような風景のイミテーションでもなく、反覆でもない、ま新しい風景だったのである。その風景が、現在小説を書いていることと、どこかで固く結びついている気がするの、当然のことかも知れない。この短篇集のあちこちに、この私の風景が点在している。時代物のなかに書いて、べつにそれほど不自然な気がしないのは、むかしは近年のようではなく時がゆっくり流れていたからであろう。私の風景の中には、あきらかに明治の痕跡が残っていたが、考えてみれば明治はたかだか二十年ぐらい前のことで、それは何の不思議もないことだった。	○
29	 ・一茶	文春文庫・1978	長編	小林一茶=弥太郎は、信濃国柏原の農家に生まれた。二歳で母に死なれ、継母を迎えたのは八歳のときだ。きっちりした性格の継母と、気持ちを惹きつけるものに集中してしまう弥太郎は気質が合わず、十五歳の春、江戸に奉公に出た。しかし、その年の暮れには奉公先を変え、翌春にはそこもやめた。十九歳のとき、弥太郎は筆屋に奉公して、道楽好きの息子に、上の句に下の句をつけて優劣を競い金を賭ける三笠付けの集まりに連れていかれた。弥太郎はここで才能を発揮し、そこから俳諧師として認められていくが、俳諧での生活は容易ではない。上方、四国、九州と旅を続け、つてを頼って一宿一飯の世話になり、ワラジ銭を集めて回る暮らしが続く-----。 ◆一茶の生涯を描く長編。江戸に出てからの十年間は、史実としては残されていない。その空白を埋めて、人物像を浮き彫りにする、鋭くも温かい視線。 □作者のことば□: われわれは、芭蕉の句や蕪村の句も記憶に残す。それは句が優れているからである。一茶にもすぐれた句はあるが、一茶の句の残り方は、そういう意味とは少し異なって、親近感のようなもので残る。それはなぜかと言えば、一茶は我々にもごくわかりやすい言葉で、句を作っているからだろうと思う。芭蕉や蕪村どころか、誤解を招く言い方かも知れないが、現代俳句よりもわかりやすい言葉で、一茶は句を作っている。形も平明である。ちょうど啄木の短歌がわかりやすいように、一茶の句はわかりやすい。そしてそれが一茶が、当時流行の平談俗語を意識したというだけでは片付かない。もっと本質的な、生まれるべくして生まれた平明さに思われる。	○
30	 春秋の檻 獄医立花登手控え/	講談社文庫・1979	長編	江戸小伝馬町の牢獄に勤める青年医師・立花登。居候先の叔父の家で口うるさい叔母と驕慢な娘にこき使われている登は、島送りの船を待つ囚人からの頼みに耳を貸したことから、思わぬ危機に陥った---。起倒流柔術の妙技と鮮やかな推理で、獄舎に持ち込まれるさまざま事件を解く。著者の代表的時代連作集。	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
31	 風雪の檻 獄医 立花登手控え/	講談社 文庫・ 1982	長編	登の柔術仲間、新谷弥助が姿を消した。道場に行くと言って家を出たまま、その後深川の遊所でよからぬ男たちと歩いているところを目撃されたという。行方を追う登の前に立ちはだかる悪の背後に、意外や弥助の影があった。何が彼を変えたのか――。熱血青年獄医が難事件の数々に挑む。大好評シリーズ第二弾。	○
32	 愛憎の檻 獄医 立花登手控え/	講談社 文庫・ 1982	長編	新しい女囚人おきぬは、顔も身体つきもどこか垢ぬけていた。下男を手なずけ貢がせるしたたかさに、登は入牢のきっかけとなる事件を探るが、どこか腑に落ちない。一方、従妹おちえの友人おあきが自分を訪ねてきたと聞き、とある約束をしていた登は慌てるが――。青年獄医の成長と葛藤を描いた傑作連作集第三弾。	○
33	 約束「橋ものがたり」所収	実業之 日本社 /新潮 文庫・ 1980	短篇	二十一歳になり、銚職人の年季奉公が明けたばかりの幸助は、万年橋に向かった。お蝶との約束にはまだ一刻近くは間があったが、落ち着かなかった。五年ぶりに会うのだ。お蝶は三つ下の十八歳。幼いころから遊び友達だったが、五年前に奉公先に訪ねてきて、引越すと告げ、料理屋に奉公に出ると言った。お蝶の家は商売を立て直すことができず、お別れに来たのだ。二人は子供ではなかったが、まだ大人でもなかった。別れ際に幸助は、「五年たったら、二人でまた会おう」と約束した。お蝶は出かける準備をしていたが、幸助に会う自信がない。顔を見られたらすぐに、いまの仕事を見破られるのではないかと、怖いのだ。そして約束の刻が過ぎた――。様々な人間が行き交う江戸の橋を舞台に演じられる、出会いと別れ。市井の男女の喜怒哀楽の表情を瑞々しい筆致に描いて、傑作時代小説。 ◆ほかに「小ぬか雨」「思い違い」「赤い夕日」「小さな橋で」「氷雨降る」「殺すな」「まぼろしの橋」「吹く風は秋」「川霧」の橋にまつわる十篇の連作集。 □作者のことば□：橋というものを連作のテーマに据えるという考えは、あらかじめ頭の中で練ったというわけではなく、Nさんと話しているその場で浮かんできた即興の思い付きだった。人と人が出会う橋、反対に人と人が別れる橋といったようなものが漠然と浮かんで来て、そういうゆるやかなテーマで何篇かの話をつくることなら出来そうに思えたのである。こうして出来上がったのが、「橋ものがたり」という連作短篇集に収録されている十篇の物語である。私は本格的に小説を書き始めてからまだ三年ほどにしかならず、それまで書いた小説の多くは武家ものと捕物帳だった。いわゆる市井ものと呼ばれる小説も書きはしたけれども、それはせいぜい四、五篇に過ぎなかったように思う。それが「橋ものがたり」の連作を引き受けたことで、はじめて集中的に市井小説を書く結果になり、書き終わったときには、どうにか自分のスタイルの市井小説を確立できた感じがしたのであった。そういう意味では、十篇の小説は、出来、不出来を越えて、いずれも愛着のある作品になったと言っていいかと思う。	○
34	 ・雪明かり「雪明り」所収	講談社 文庫・ 1980	短篇	三十五石古谷家から二百八十石の上土芳賀家に養子に出た菊四郎は、数年ぶりに義妹の由乃に出会った。由乃は父の後妻の連れ子で、血のつながりはない。ある日、菊四郎は父から、由乃が嫁ぎ先で大病で寝込んでいるらしいが、母が見舞いに行っても姑に追い返されると相談を受けた。婚家の姑が拒むのを菊四郎は強引に上がり込み、事情を聞くと、やせ細った由乃を背負って実家に連れ帰った。由乃は流産直後も働かされ、倒れたのだ。二カ月して、由乃は茶屋に奉公に出た。菊四郎はその茶屋に通うようになった。菊四郎も祝言を控えていたが、由乃と会っているときがいちばん素直になれる――。 ◆ほかに「恐喝」「入墨」「潮田伝五郎置文」「穴熊」「冤罪」「暁のひかり」「遠方より来る」の七篇。	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
35	 ・氷雨降る「橋ものがたり」所収	新潮文庫・1980	短篇	<p>北本所表町に大きな小間物屋を構える吉兵衛は、商いは繁盛して旦那と呼ばれる身分になり、女房も息子の豊之助もいまの境遇にとっぷり浸かっている。豊之助に店を任せているが、やりすぎだと思っほど商売に抜け目がない。五十を過ぎて、何か大きな忘れ物をしているような虚脱感があるが、それがなにかはわからない。馴染みのおくらの店で飲んでの帰り道で、大川橋に、行くときも出会った若い女が川を見下ろしていた。そのままにできず、吉兵衛はおくらの店に連れて行った。おひさという女は、理由も言わないままおくらの店で働いていたが、ひと月ほどして、おひさをやくざが捜していることがわかる。吉兵衛はおひさを匿ったが――。 ◆ほかに「約束」「小ぬか雨」「思い違い」「赤い夕日」「小さな橋で」「殺すな」「まぼろしの橋」「吹く風は秋」「川霧」の橋にまつわる十篇の連作集。</p>	○
36	 ・思い違い「橋ものがたり」所収	新潮文庫・1980	短篇	<p>指物職人で醜男源助は、毎日両国橋で見かける女が町のごろつきにからまれているのを助け、話をした。おゆうという名で両国のそば屋で働いていると言ったが、その三日後から姿を見せなくなった。半月後、親方に呼ばれ、娘のおきくとの縁談を持ち掛けられた。おゆうが気になる源助は両国のそば屋に行ってみたが、おゆうはいなかった。ある日、おきくに呼び止められた。高慢ちきな娘でよく縁談を承知したと思っていたが、おきくの腹には子ができていた。源助は子の父親と話すべきだと言って返したが拍子抜けした気分だった。おきくとの縁談が流れ、兄弟子に誘われて、岡場所に上がった。そのとき源助の前に現れたの女はおゆうだった。 ◆ほかに「約束」「小ぬか雨」「氷雨降る」「赤い夕日」「小さな橋で」「殺すな」「まぼろしの橋」「吹く風は秋」「川霧」の橋にまつわる十篇の連作集。</p>	○
37	 漆黒の霧の中で 彫師伊之助捕物覚え/	新潮文庫・1980	長編	<p>豎川に上がった不審な水死人の素性を洗って、聞き込みを続ける伊之助の前に繰り広げられる江戸の町人たちの人生模様――。そして、闇に跳梁する謎の殺人鬼による、第二、第三の殺人――。伊之助の孤独な探索は、大店の主人や寺僧たちの悪と欲の世界を明るみに出すが――。元は凄腕の岡っ引き、今は版木彫り職人の伊之助を主人公とする、絶妙の大江戸ハードボイルド。シリーズ第二弾！</p>	○
38	 夜の橋「夜の橋」所収	文春文庫・1981	短篇	<p>博奕に溺れたせいで夫婦別れしたおきくが、半年ぶりに訪ねて来た。再婚話の相談で、もう自分には関係ないと一旦は突き放す民次だったが、相手がまぎれもないやくざ者と分かるや、危険を顧みず止めに出る。――雪降る江戸深川の夜の橋を舞台に、すれ違う男女の心の機微を哀感込めて描いた表題作、「一夢の敗北」「冬の足音」等全九篇。 □作者のことば□：雑誌に書く小説には、当然枚数の制限がある。私はプロットを決めないで書き出してしまうことが多いので、枚数ピッタリで収まりそうだとか、少し足りないようだとかいう見当は、少し書き進めてからでないとは出てこない。足りないときは何とかなるが、これはもっと長くなるテーマだったかと気づいたときは、あまりいい気持ちがしない。ちぢめなければならないから、あちこち無理が出るだろうという事が、気持ちを重くするのである。しかし、そのために作品が出来なかったときは、プロットを決める労を惜しんだ報いだと思って、あきらめることにしている。</p>	○
39	 ・時雨みち「時雨みち」所収	新潮文庫・1981	短篇	<p>太物問屋の機(はた)屋は、芝神明あたりでは知られた大店だ。現在の主人である新右衛門は、大伝馬町の太物問屋の手代だったが、外商いで機屋に出入りするうちに、主人から婿に望まれた。今は四十五歳だ。一年前に、昔の奉公仲間の市助が品物を扱わせてくれと言ってきたので、破格の条件で卸すようにしたが、あまりありがたそうなせぶりも見せないのが面白くない。酒も度重なれば思い出話も尽きる。そんなころ、市助が昔好き合っていた女の消息を漏らした。子堕ろしをさせたあげく、入り婿になるために冷たく捨てた女だ。いまになって心が痛み、新右衛門は会いに行くが――。 ◆ほかに「帰還せず」「飛べ、佐五郎」「山桜」「盗み喰い」「滴る汗」「幼い声」「夜の道」「おばさん」「亭主の仲間」「おさんが呼ぶ」の十篇。</p>	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
40	 ・霜の朝「霜の朝」所収	新潮文庫・1981	短篇	<p>霜が降りた冷え込みの激しい朝、豪商奈良屋茂左衛門は、将軍綱吉のあとを継いだ六代将軍家宣により、悪評高い宝永通宝の使用が取りやめになったという報告を聞く。側用人柳沢吉保らと賄賂で結びつき、材木請負で富を築き、新銭鑄造で巨富を得た紀ノ国屋文左衛門にとって命とりの事態だ。これで紀文も終わりだ、と茂左衛門はおもう。吉原で競った豪華な遊び、自分が奉公に出て以来の道のりも思い出す。自分が手折ろうとして逃げられ、捜すように命じていた吉原の女お里の報告も聞く。小判をばらまいて女たちに口で拾わせた遊びで、一人だけ拾わず「お金は、働いてもらいます」と言ったお里は、大工の子を産んだという報告だが、じつは――。 ◆ほかに「報復」「泣く母」「噓(くしゃみ)」「密告」「おとくの神」「紅の空」「禍福」「追われる男」「怠け者」「歳月」の十篇。</p>	○
41	 密謀	新潮文庫・1981	長編	<p>織田から豊臣へと急旋回し、やがて天下分け目の「関ヶ原」へと向かう戦国末期は、いたるところに策略と陥穽(かんせい)が口をあけて待ちかまえていた。謙信以来の精強を誇る東軍の雄・上杉で主君景勝を支えるのは、二十代の若さだが、知謀の將として聞える直江兼続。兼続の慧眼と彼が擁する草(忍びの者)の暗躍を軸に、戦国の世の盛衰を活写した歴史・時代小説。秀吉の遺制を次々と破って我が物顔の家康に対抗するため、兼続は肝胆相照らす石田三成と、徳川方を東西挾撃の罠に引き込む密約を交わした。けれども、実際に三成が挙兵し、世を挙げて関ヶ原決戦へと突入していく過程で、上杉勢は遂に参戦しなかった。なぜなのか――。筆者年来の謎に解明を与えながら、綿密な構想と壮大なスケールで描く渾身の戦国ドラマ。 □作者のことば□: 米沢藩上杉について、なかでも私の最大の疑問は、関ヶ原の戦いにおける上杉の進退ということだった。この戦いで上杉は会津百二十万石から米沢三十万石におとされる。その封土削減は、むろん関ヶ原で敗戦組に回ったせいだが、精強をほこる上杉軍団が、あの天下分け目の戦いで、戦らしい戦をしていないことが、私には納得がいかなかったのである。人がいなかったわけではない。謙信のあとを継いだ景勝は沈着勇猛な武将だったし、執政には、当時屈指の器量人と呼ばれた知勇兼備の直江兼続がいた。ぎ下の 武将は謙信以来の軍法をわきまえ、伝統の精強さを失ってはいなかった。その強国上杉が、あの重大な時期に戦らしい戦をせず、最後には会津から米沢に移されて食邑四分の一の処遇に甘んじたのはなぜだろうか。毎日新聞に連載した「密謀」は、およそそいった長年の疑問、興味に、私なりの答えを出してみたい気持ちに駆られて書いたものである。</p>	○
42	 ・山桜「時雨みち」所収	新潮文庫・1981	短篇	<p>野江は五年前の十八歳のとき嫁入りしたが、夫に死なれ、実家に戻された。一年前に磯村に再嫁したが、磯村の家は一家を挙げて金貸しに狂奔し、野江を出戻りと軽んじる気配も見えた。叔母の墓参りを済ませた帰り道で、通りかかった手塚弥一郎に山桜を手折ってもらった。手塚は再婚話を持ち込まれた相手の一人だ。剣の達人と聞いて粗暴な男かと思っていたが、眼はおだやかな光をたたえていて、今は幸せか、と案じてくれた。その年の暮れ、手塚が富農から賄賂をとり農政に口出して小農を疲労させた男を斬り、蟄居させられた。夫が手塚の心情を理解しないことに嫌気がさして、野江は家を出た。また春が来て、野江は手塚の家を訪ねてみた――。 ◆ほかに「帰還せず」「飛べ、佐五郎」「時雨みち」「盗み喰い」「滴る汗」「幼い声」「夜の道」「おばさん」「亭主の仲間」「おさんが呼ぶ」の十篇。 □作者のことば□: 親子は断絶の時代を通り越して、殺しあう時代になったらしい、と新聞記事を読みながら嘆息する。そしてこういう終末的な現象が横行する時代に、むかしの絵空事を書くことがどれほどの意味をもつのだろうかと自問したりする。しかし、たとえばむかしの姥捨ては凶器を用いない親殺しだろう。それを経済的な理由からだけする説明を私は信じない。姥捨ては人間の心にすでに存在していたことで、だからいまの世にも無数の親が捨てられるのである。金属バットは、何の脈絡もなく突然に出てきたわけではない。元来人間の内部にあるカオスが、不幸なきっかけを得てひょいっと顔を出してしまったという事だろう。むかしもいまも、人間が混沌を抱えて生きる存在だという一点は不変で、小説が人間を書く作業である以上、あらゆる小説に書かれてしかるべき理由があるだろうと自答する。</p>	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のことば	蔵書
43	周平独言	中央公論社・1981	エッセイ・自伝	「私のエッセイは炉辺の談話の如きものに過ぎない」と記す著者による初のエッセイ集。惹かれてやまない歴史上の人物、創作への意欲、故郷への思いが凝縮された一冊。 □作者のことば□:私は他人のエッセイ集を読むのは大好きで、またよく読むのだが、自分のエッセイを本にまとめるという事になると、ちょっと二の足を踏むような気分になる。気恥ずかしさが先立つのである。大体小説を書いている以上は、さほどの中身のない私の人間というものは、いやおうなしにそのまま小説に出て来る。そのことは、小説で暮らしの糧を得ているからには仕方のないことだと思う。だがエッセイとなると、その内容浅薄な私なるものを、さらに楽屋裏まで披露するようなものではあるまいか。気取ったところで仕方なからうとは思ふものの、恥の上塗りという気がしないでもない。	既読
44	 雲奔る 小説・雲井龍雄	中央文庫・1982	長編	私の郷里から、明治維新と呼ばれる激動期に、志士として積極的にかかわり合った人が二人いる。一人は清川八郎であり、一人が雲井龍雄である。子供のころ私は、雲井龍雄の名を、「棄児行」の詩と一緒に、尊皇の志士として記憶した。しかしその後、維新史の中に龍雄の姿はひそと隠れているようで、表面に出ることがないのを異様に感じた時期がある。事実龍雄処刑のあと、郷里米沢では、龍雄の名を口にするのを久しくタブーにした。龍雄に対する、長い間の一種の気がかりのようなもの、それがこの小説を書かせたことにならうか。	○
45	 刺客 用心棒日月抄	新潮文庫・1983	長編	お家乗っ取りを策謀する黒幕のもとから、五人の刺客が江戸に放たれた。家中屋敷の奥まで忍び込んで、藩士の非違を探る影の集団「嗅足組(かぎあしぐみ)」を抹殺するためである。身を挺して危難を救ってくれた女頭領佐知の命が危ないと知った青江又八郎は三度び脱藩、用心棒稼業を続けながら、敵と対決するが――。好漢又八郎の凄絶な闘いと、佐知との交情を描く、代表作「用心棒シリーズ」第三編。 □作者のことば□:私はかねがね北国の人間は口が重いというのは偏見だと思っている。あれは外部の、自分たちよりなめらかに口が回る人種の前でいつとき口が重くなるだけのことで、内輪同士ではそんなことはない。子供のころ、私は村の集会所あたりで無駄話にふけている青年たちの話をよく聞いたものだが、彼らがやり取りする会話の面白さは、絶妙だったという記憶がある。弾の打ち合いのように、間髪を入れず応酬される言葉のひとつひとつにウィットがあり、そのたびに爆笑がおきた。村の出来事、人物評、女性のはなしなど、どれもこれもおもしろかった。私たち子供も面白がって笑っていた、突然に怒られて追い立てられたのは、野の若者たちの雑談の成り行きで自然で、話が少し下がって来たからだったろう。内部の制圧がややうすれた時期になって、私の中にも、集会所の若者たちほどあざやかでないしろ、北国風のユーモアが目ざめたという事だったかも知れない。	○
46	 帰ってきた女「龍を見た男」所収	新潮文庫・1984	短篇	天に駆けのぼる龍の火柱のおかげで、あやうく遭難を免れた漁師の因縁――。無名の男女の仕合せを描く傑作時代小説8篇を収録している。 □作者のことば□:厳密に言えば、ひとつの小説には、その小説に適合して動かせない一回限りの名前というものがあるはずである。登場人物に、適合性も何もない符牒のような名前はつけたくない。そう思いながら、忙しまみれに以前使ったことがある名前を持ち出したりして恥をかいているのが実情だが、小説の場所というものには、名前ほどの厳密性はないように思われる。二度、三度と使っても何とかなるようである。それにしてもまた、両国橋、堅川のほとりかと、最近はこちらの方も気になってきた。市井短篇は嫌いでないけれども、名前と場所の両方から責められて、世界がだんだん狭くなってきた気がする。	○
47	 立花登手控え/	講談社文庫・1983	長編	死病に憑りつかれた下駄職人の彦蔵が「三十年前に子供をさらった」と告白する。その時子供を二人殺したという相棒によく似た男を、登は牢で知っていた。彦蔵の死後、おちえから最近起きた”子供さらい”の顛末を聞いた登は、ある行動に出る――。医師としての理想を模索しつつ、難事に挑む登の姿が胸を打つ完結編。	○
48	 よろずや平四郎 活人剣/	文春文庫・1983	長編	神名平四郎。知行千石の旗本の子弟、しかし実質は、祝福されざる冷や飯喰い、妾腹の子である。思い屈し、実家を出奔、裏店に棲みついたまではよいのだが、ただちに日々のたつきに窮してしまう。思案の揚句、やがて平四郎は奇妙な看板を掲げる。――喧嘩五十文、口論二十文、とりもどし物百文、よろずもめごと仲裁つかまり候。	○

	作品の題名	発行	備考	あらすじ/作者のこぼ	蔵書
49	 海鳴り	文藝春秋・1981	長編	<p>はじめて白髪を見つけたのは、いつの時だったろう。四十の坂を越え、老いを意識し始めた紙商・小野屋新兵衛は、漠然とした焦りから逃れるように身を粉にして働き、商いを広げていく。だが妻とは心は通じず、跡取り息子は放蕩、家は闇のように冷えていた。やがて薄幸の人妻おこうに、果たせぬ思いを寄せていく。この人こそ、生涯の真の同伴者かも知れない。家にはびこる不和の空気、騷りを見せ始めた商売、店を狙い撃ちにするかのような悪意――心労が重なる新兵衛は、おこうとの危険な逢瀬に、この世の仄かな光を見出す。しかし闇はさらに広く、そして深かった。新兵衛の心の騷りを軸に、人生の陰影を描いた傑作長編。 □作者のこぼ□:私がかねて一冊ぐらいは市井ものの長編小説を書きたいと考えていたのだが、案外にその機会がなかった。私は「海鳴り」で、精神的にも肉体的にも動揺しがちな中年とい世代から、一組の男女をひろい上げてその運命を追ってみたのではあるけれど、チャンバラの楽しさがあるわけでもなく、七首一本光るわけでもないただのひとの物語は、強い刺激が好まれる現代では、いささか発表をためられるのである。(中略) 打ち明けると、私は「海鳴り」を書き始めた当初、物語の主人公である新兵衛とおこうを、結末では心中させるつもりでいた。だが、長い間付き合っているうちに二人に情が移ったというか、殺すのには忍びなくなつて、すこし無理をして江戸から逃がしたのである。小説だからこういうこともあるわけだが、そうしたのはいは私の年齢のせいかも知れない。むごいことは書きたくなかった。せつかく逃がしたのだから、作者としては読者ともども、二人が首尾よく水戸城下までのがれ、そこで、持って行ったお金でひっそりと帳屋(いまの文房具店)でも開いて暮らしていると思いたい。</p>	○
50	 白き瓶 (小説長塚節)	文春文庫・1988	長編	<p>清搜鶴のごとく住んだと評され、妻も子も持たぬまま逝った長塚節。旅と歌作にこわれやすい身体を捧げた短い生涯をくまなく描く、筆者渾身の鎮魂の賦(ふ:感じたことをそのまま述べあらわした漢詩)。吉川英治賞受賞作。 □作者のこぼ□:発端は、平輪光三著「長塚節・生活と作品」という本だった。昭和十八年一月に、東京・神田の六芸社から発行された初版四千部のこの本の一冊が、そのころ山形県鶴岡市の郊外に在る農村に住む私の手に入ったのである。それは本が出たその年か翌年の十九年のことで、私は十六か十七だったことになる。その年齢の私はその本にひきつけたものが何だったのかは、いま正確には思い出すことはできないのだが、ひとつはやはり、中に引用されている「初秋の歌」「乗鞍岳を憶ふ」などの短歌作品だったろう。それはいかにも文学好きの農村青年だった私に訴えかけるリリズムと、理解しやすい親近感をそなえた歌だったのである。それと短歌ほどには明快に理解できなかったものの、黒田てる子との悲恋が醸し出すロマンチックな雰囲気とか、独身のまま三十七歳の生涯を閉じた歌人の悲劇性といったもの、そして付け加えればそれらの事実を記述する筆者の、抑制のきいたしかしながらどこか情熱を感じさせる文章などが、私の気持ちをその本にひきよせた要素ではなかったかと思う。ともかくそんなことから、その一冊の本は私の愛読書となり、その後私の長い療養生活とか、生家の破産とかがあつて、若いころの私の蔵書があらかた四散してしまった中で、不思議にいまも手もとに残る一冊となつたのである。</p>	○
51	 市塵	講談社文庫・1983	長編	<p>貧しい浪人生活から儒者、歴史家としてようやく甲府藩に召し抱えられた新井白石は、綱吉の死後、六代将軍家宣となつた藩主とともに天下の経営にのりだしていく。和漢の学に通じ、幕政改革の理想に燃えたが、守旧派の抵抗は執拗だった。内政外交の両面で難題に挑んでいく。綱吉時代に乱れた経済立て直しのための通貨改革、朝鮮使節との交渉。国のため、民のために正論を吐く白石だが、その活躍ぶりを快く思わない政敵も増えた。そんななか、白石を全面的に庇護してきた家宣の死で、白石の運命は、又大きく変わることとなつた。政治家としても抜群の力量を発揮した白石の生涯を描く長編感動作。 □作者のこぼ□:時代小説というのは内懐が深いから、この小説の場合は白石という評伝でもあり、人間を通じた時代小説でもある様な小説が出来上がりました。ついでに言えば往々にして歴史小説は時代小説より少し上にある様に言われることもあるが、私はそうは思わない。時代小説は虚構を主とし、歴史小説は事実を主として書くのだが、虚構が事実に劣るといふのは偏見でしょう。書く方から言えば、虚構の物語を作る方が難しい。(常盤新平との対談より)</p>	○